

イギリス留学が  
眠っていた可能性を引き出してくれました

  
タレント  
ハリー杉山さん

スポーツ、音楽、映画、ファッション、語学力など多彩な知識と特技を武器に、さまざまなジャンルのテレビ・ラジオ番組などで情報を発信しているハリー杉山さん。11歳のときにお父様の祖国・イングランドに移住し、青春時代を過ごしました。イギリスで学んだ経験で大きく価値観が変わり、個性を表現する現在のお仕事につながっているというハリーさんに、現地での学校生活についてお聞きしました。

PROFILE

ハリー杉山（はりーすぎやま）さん

1985年1月20日生まれ。東京都出身。イングランド人ジャーナリストの父の影響を強く受けて育つ。母は日本人。11歳で渡英し、13歳のときに英国最古のパブリックスクール、ウィンチェスター・カレッジに入学。ロンドン大学進学前からモデルの仕事を始め、現在はタレント、MC、ラジオDJ、執筆活動など多岐に渡って活躍中。

取材・構成／中原紫恵 写真／鈴木貴子（ひび写真事務所）  
ヘアメイク／高野雄一（yours beauty） スタ일리スト／前田原弘  
衣装／すべて agnes b

「普通じゃだめだ」  
新しい環境での気づき

—— 11歳のときからロンドンの学校に通われたそうですね。ハリーさんにとっての留学の第一歩はいかがでしたか？

なじむまでは、だいぶ時間がかかりました。日本の自宅では両親が英語と日本語、フランス語も交えて話すような環境で、インターナショナルスクールに通っていたのですが、ロンドンで入った学校が少し特殊だったんです。僕は13歳から18歳まで、尊敬する父の母校でもあるウィンチェスター・カレッジという全寮制の私立学校で学びました。イギリスではこの全寮制私立学校を「パブリックスクール」と呼びますが、パブリックスクールに入るための準備をする「プレップスクール(preparatory school)」だったんです。いわゆるエリート層が集まっている学校で、彼らが使う独特の英語の言い回しもよくわからないし、まずその空気感に圧倒されてしまいました。

幼い頃は体も弱く、性格的にもシャイな子でした。友達から反対意見を言われたら、いじめられていると感じてしまうような弱虫で。それに、すでに5年くらい一緒に過ごしていたクラスの中に唯一のアジア人として転入し

たので、かなり萎縮してしまいましたね。先生に叱られず、友達にもからかわれずに過ごすことだけを考えて、なんとか目立たずに一日を乗り切るようにする毎日でした。

向こうでは必須科目のフランス語とラテン語を、僕は日本で習っていませんでした。5年のビハインドがあるので当然できなかったのですが、その成績が貼り出されてしまうんですよ。先生にも注意されるし、たった1人のアジア人の成績が悪ければ、悪目立ちして生徒たちのからかいの対象になってしまいます。だから、フランス語とラテン語は家庭教師をつけてもらってみっちり勉強して、2・3か月でみんなに追いつきました。バカにされたくないという反骨心と、先生に怒られたくないという思いで勉強したのですが、これが「何も行動せず、普通に埋もれていたらだめなんだ」と体感した初めての経験だったと思います。

シャイボーイだった僕が、興味を持ったことにはためらわずに飛び込み、人の殻を打ち破ってすぐに仲良くなれるようになったのは、ジャーナリストの父の影響もありますが、ロンドンに行って「個性を持たないとやっていけない」と知ったからでしょう。体も鍛えて、スポーツでも個性を發揮できるようになりました。子どもたちの間では、スポーツができると一目置かれますよね。1年半後には、先生からの信頼を得て、生徒たちの人気も獲得していると認められたのか、生徒会長に任命されました。



ウィンチェスター・カレッジ

“Why?”を問い続ける  
イギリス教育

—— そして13歳で名門パブリックスクールのウィンチェスター・カレッジに入学なさいました。授業はどのような感じでしたか？

1日、びっしりのスケジュールです。8時45分に教会に行くことから始まり、9時から10時25分まで授業。ティーブレイクがあって、10時50分から13時まで授業。ランチタイムをはさんで、14時から16時までが部活。僕はサッカー部でした。そしてまた18時まで授業があって、その後はまたティーブレイクの後、プレップタイムという宿題の時間もありました。

知っておくべき歴史などは、プレップスクール時代からかなり膨大な知識を丸暗記しました。でも、授業は基本的にディベートです。常に“Why?”「なぜ?’という問いを投げかけられます。「私はこう思うけど、あなたはどう思う?’と全員が聞かれて、自分の意見を述べるんです。「こういう可能性があったかもしれないよね」と話し合ったりして、宿題やテストは小論文のような形で提出でした。

「なぜこうなったの?’と問い続けることの大切さを、イギリスの教育から教えられました。街を歩いていたなら「なぜあの女性は青い服を着ているんだろう?’という問いが生まれたりし





ウィンチェスター・カレッジ時代の仲間と20代に再会

ます。趣味のランニングで、「なぜタイムが落ちてしまったんだろう?」と考えたりもします。「なぜ?」と問う癖をつけてもらいました。常に自問自答しないと、人は進化しないのではないのでしょうか。

日本との大きな違いのもうひとつが、1クラスの生徒数。10人から15人と少人数制なので、先生との距離が近いんですね。あの時に出会った先生たちは今でも僕の中でのスター的な存在です。特に全寮制なので、先生がメンター(mentor/良き指導者、助言者、師匠)になってくれるんです。あのときの先生たちからは学ぶところがたくさんあって、今でも懐かしく恋しくなります。僕にとって絶対的な存在である父とはまた違う、人生のメンターになっていますね。

## やんちゃ盛りの 充実した学校生活

—— 学校行事などで、印象に残っているものを教えてください。

おもしろいイベントはいっぱいありました! プレップスクールの話に戻りますが、運動会で「ガン・ラン」というのがあるんです。「ガン」とは、銃ですね。創立者が軍人さんだった名残りの競技なのですが、大砲を持って障害物競走をするようなチーム競技なんです。大砲は大きすぎて、そのまま運ぶと障害物を越えられません。

だから、まず大砲を解体してみんなで分担して持って、障害物をクリアして走って、みんなで組み立てるまでを競うかけっこです。もちろん、本物の大砲ではないですよ。(笑)

ウィンチェスター・カレッジでは、毎年2学期(1~4月)に独自のルールの「ウィンチェスター・カレッジフットボール」のシーズンがありました。ラグビーとサッカーを足して2で割ったようなスポーツです。スクラムのようなものを組みますが、それは「ホット」といいます。雨の多いロンドンで、ドロドロになりながら、相手を蹴り飛ばすみたいな感じでしたね。ピッチの両サイドにロープで作った壁のようなものがあるので、そこに押しつけられて腕は血だらけになりますし(笑)、けっこう激しいスポーツですけど、楽しかったですね。

それから、寄宿舎制の学校だったので、サッカーやそのほかいろいろなスポーツで映画「ハリー・ポッター」に出てくるような寮対抗戦もありました。

—— 寮生活はいかがでしたか?

寮ごとにルールや雰囲気は違いましたが、僕はラッキーな寮にいました。寮の管理をする「ハウスマスター」の先生がいい人で、意見しても大丈夫でしたし。寮によっては、先生に立ち向かうとアウトの寮もあったと思います。1・2年めは、同級生と1つ上の先輩を合わせて15人くらいが一緒。3年めで同学年6人になって、4年めで2人、トップイヤーの5年めは1人部屋でした。これも寮によって違いましたが。

若いパワーにあふれる男子ばかりですから、たまには殴り合いのケンカもありましたし、夜、街に遊びに行くと門限を破ったりと、いろいろありま

した。ふざけて夜寝ている後輩のベッドをそのままひっくり返したり、ここでは言えないイタズラなどもたくさんありましたよ。(笑)

—— 男子校ご出身ですが、恋のチャンスはなかったのでしょうか?

近くの女子校と交流があって、ダンスパーティーに我々男子が乗り込むんです。年に1度のそのプロムのようなチャンスには、みんなエネルギーを注いでいたと思います。僕もすごくガールフレンドが欲しかったんですが、できませんでした…。ラストイヤーの5年生の学園祭では、僕がディレクターとしてファッションショーを企画したんです。近くの女子校の子や、友達の友達のようなつながりで女の子も誘って参加してもらって。表向きの方針は地域活性化をうたっていましたが、正直に言えばモテたかったという理由です。(笑)でも、もちろん生徒たちはかわいい女の子を見たくて集まるし、先生たちにも楽しんでもらって、もり上がりました。それなのに、いちばんかわいくて「この子と付き合えるかも」と思っていた女の子は、あっさりイケメンの男子に奪われてしまったんです…。どんなにがんばっても、サッカー部のキャプテンとか、わかりやすくカッコいい友達と比べたら、僕はモテませんでしたね。(笑)



## 困難を経験してこそ 人としての厚みが出る

### —— イギリスへの留学はどんな人におすすめでしょうか？

基本的に、イギリスは日本人の気質に合うと思うんですよ。ちょっと気さくなところがあって、僕の経験上、老若男女、誰でもウェルカムだと思います。僕が行った20年以上前には日本人は「アジア人」という大まかなイメージでとらえられていたと思いますが、今は日本人とはどんな存在感なのか、認知されている気がしますし。イギリスの長い歴史や文化、ファッション、音楽など、文化的な面で響くところはたくさんあるんじゃないかと思います。ちょっとアーティストックな人にとってはいちばんいいかもしれません。

でも、留学される方に少し厳しいことを言えば、すべてバラ色かというところではないと思います。日本は素晴

らしい国ですが、平和すぎて感覚が鈍っているのか、世の中で何が起きているのかを知らない人が多いように感じるんです。社会情勢について、もっとアンテナを敏感に立てておいた方がいいと思います。イギリスに行くなら、たとえばEU離脱がどのような意味を持つのかきちんと理解していなかったら、「は？」と冷たい視線を浴びることを覚悟しておかなくてはならないです。まず行くという行動力も大切ですが、ノリで行ってしまうと痛い目に遭うので、心構えや準備してほしいと思います。

### —— 英語の準備についてはどうお思いになりますか？

僕が思う語学学習のコツは、失敗を恐れないこと、それだけです。間違えたからって落ち込むことはありません。間違いがなければその先は見えてきませんから。僕の父がよく「上に向かって失敗しろ」と言うんですけど、これは英語のことだけではなくて、

すべてに通じることです。

留学すると、たとえばホームステイ先で嫌な気持ちを味わうとか、自分で家を借りたら水が出ないとか、隣の部屋の人が早朝4時まで音楽をガンガンかけているとか、予想外のことがたくさん起こると思うんです。でも、生きているとモヤモヤすることはたくさんありますよね。「こういう場合はどう対応しようかな」と経験を通して考えて、決着をつけて進んでいく。留学は、いろんなサプライズとともに人生の歩み方を教えてくれると思います。起こったサプライズにチャレンジしていくと、英語で言う“Your skin becomes thicker.”、『皮膚がだんだん厚くなる。』皮膚が厚くなれば刺激に強くなるように、いろんな対応力が身についていきます。すべては経験です。

僕もいつか子どもができれば、海外に留学させたいなと思っています。

From Harry

### 僕の“踏み出した”エピソード

ウィンチェスター・カレッジに入学が決まってから、入学前の顔合わせで、僕は将来のクラスメイト一人ひとりに、自分から挨拶して回ったんです。これから5年間一緒にいる友達なのだから、早く仲良くなった方がいいと思ったのですが、実際、そこで仲良くなった子が親友になりました。それは、幼い僕にずっと父が言い聞かせてきた“Assert yourself. (自分を主張しなさい、前に押し出しなさい)”という教えを行動に移せた瞬間でした。後のいろんな結果につながる一歩だったと思います。みなさんも、“Don't be afraid, assert yourself. (恐れずに自分を主張して)”。勇気を出して一歩を踏み出してください！

NICE ONE!

